



古村 伸宏

秋の訪れが待ち遠しい毎日が続く。緩むことのない日差しの中、政局も陽炎のようなつかみどころのない状況が続く。法制化も民主党代表選まで表立った動きにはならないが、実践はすでに法制化を先取りした挑戦が続く。

9月1日より、埼玉県が緊急雇用の財源を活用し、「生活保護受給者チャレンジ支援事業」をはじめた。半期で総額約5億円規模の「貧困」「失業」対策の事業である。そのうち、センター事業団は「職業訓練支援員事業」という就労支援を担うことになった。いま全国的に、「派遣村」以降の生保制度の運用改革に合わせて、自立支援が喫緊の課題になっており、とりわけ生活・就労の一体的な支援がクローズアップされている。その手法も「パーソナル・サポート」(寄り添い型)や「居場所づくり」など、新しい挑戦が始まっている。この分野を協同労働で担う意味は何か。その本質は、人と人の結びつきを拓くことであり、もっとも困難な課題に3つの協同の実践を持ち込むことになる。全国から精鋭も結集し、埼玉から全国へ、「脱貧困」の挑戦が始まった。

協同労働が、「失業・貧困」、「地域再生」に真正面から取り組む上で、とりわけ職業訓練・基金訓練の位置づけが、あらためて求められてきた。現在50を超えるコースが全国で組まれているが、取り組む意味を深める上で、この取組みから誰とつながり、何を生み出すのか、という目的意識を持ち、

発信する力はまだまだ弱い。失業当事者と結び、地域で仕事をつくり出したいと願う人々とつながり、地域全体が活力を生み出していくことを求めるネットワークをつくる、という大前提を持ち、この職業訓練と事業の拡大を一体的に進める必要がある。連合会では、特に地域労協の所在する自治体への訪問行動を始めている。尼崎市への訪問では、仕事支援課と就労困難者を巡る就労支援で意気投合し、保護課と生保受給者の自立支援で政策立案の段階からの参加を快諾された。あらためて、自治体との継続的な情報交換と協議の機会を連合会として設けていく必要性を実感した。これから10月いっぱいを目途に、主要な自治体への訪問を通じて、上記の課題を中心に働きかけを強めていきたい。またその行動が、地域労協の元気と希望を生み出していくものとして期待したい。

全国協同集会の準備も佳境に入った。全体会では、サッカーW杯日本代表の監督を務めた岡田武史さんからビデオメッセージをいただく準備を進めている。「サッカーがチームスポーツであるということを示したい」とW杯直前に語った岡田さんから、「協同」へのメッセージをいただくことができれば、さらに集会の意義は増すだろう。「四国は一つ」は可能か？ このテーマは、「なぜ、いま協同か」へと続くものだ。そしてそれは、「一人じゃない」といえる社会をつくり出していく、そのための協同集

会とそのネットワークづくりであることを問うことにある。四国アイランドが、一つのコミュニティとして成り立つために、協

同集会の準備を収斂させていきたい。その結集軸は「仕事おこし」である。

📄 研究所だより

榎本 木綿

残暑厳しい日本を抜け出し、岡安副理事長とともに北京で開催されたICA-AP総会(2010/9/02-05)に参加してきました。じつは随分前になりますが、機会に恵まれ北京に留学した経験があります。その後、再訪することもないまま時が経ち、この度懐かしの地に十数年ぶりに降り立ちましたが、そこはまったく私にとって見ず知らずの場所と化しておりました。

街はオリンピックを境に大きな変化を遂げ、街なかの様子も人びともすっかり変わっており、北京風物(?)であった自転車やバスを使った朝の通勤、通学の様子もすっかり自家用車や電動自転車に取って代わりました。町は区画整理で高層ビルが立ち並び、道路は拡大拡張され、屋台街やリヤカーで荷を運びこんでいた自由市場などは人びともともに一掃され、「あのリンゴ売りや野菜売りの人たちはどこへ行ったんだろう」と、一抹の寂しさを覚えました。

北京の人びともとても洗練され、皆手には携帯電話、デジタルカメラを携え、マナーもすっかり西洋化して、お店に入れば店員が柔らかな笑顔で迎え入れてくれました。つい以前と比べてしまい、本当にこれは同じ国だろうか…とすら思えるほどでした。

ICA-APへの参加のほかに、今回はもう

一つ楽しみにしていたことがあります。総研理事でもある大高研道先生のご紹介で、北京市に四つある重点大学の一つ、北京師範大学の余 暁敏准教授を訪問してきました。余先生は北京師範大学の社会発展および公共政策学院の所属で、主に中国国内における労使関係などをテーマに研究されてきましたが、現在は社会的企業に注目し研究調査を始められたところだそうです。労使関係から社会的企業へと関心が移行した背景には、加速する中国の市場経済化を前に拡大する社会的弱者の救出を考え、より具体的な手段となり得る社会的企業に興味を覚えたそうです。今後は欧米や日本などの実践を研究し、中国での社会的企業の育成に少しでも貢献したいと考えていらっしゃる。ソーシャルインクルージョンに取り組む労働者協同組合の活動にもたいへん共鳴してくださり、ぜひ東アジア圏でのこうした研究グループを作りたい!という熱い思いを語り合い、再会を約束しました。余先生には近々、「協同の発見」にて中国の社会的企業の現状についての報告をご寄稿して頂くことになりましたのでお楽しみに。

ICA-APの総会については後日、本紙で報告いたしますが、初めて参加した総会はとても良い勉強の機会となりました。しか